で 高唱しながらデモ隊は銀座へ進み、 会が解散命令によって潰されると、 催されたアナキズム大演説会が結成大会であったとしていいのか、不明確なのである。 黒色青年連盟が結成されたのであるか、あるいは翌年一月三十一日、東京芝公園の協調会館で開 黑色青年連盟 農民労働党結成に反対し抗議するために東京でアナキストの会合が行なわれたが、 が結成された年月は、 憤激した大衆は黒旗を飜して抗議デモをはじめた。革命歌 商店の窓ガラスを破壊して警官隊と衝突した。 現在では明確ではない。 一九二五年十一月末(月日不明) これが帝国議 その日に この演説

が、未だ一度も全国的にも、 ど総てを包含した組織であったからである。多く存在したグループは独自の運動を展開してい 絡機関としての役割を演ずることになった。 されていたことを示している。東京の黒連は三月から機関紙「黒色青年」を発行し、全国的な連 これに続いて全国各地に次々と地方的黒連が結成されたことは、 から出発したと言っても誤りないだろう。黒連はわが国で最初の凡ゆる傾向のアナキスト 会を震憾させた銀座事件である。 画期的な足跡を残すことになった。 地方的にも、連絡機関を持ったことはなかったからである。 結成の月日は不明確ではあるが、黒連の結成はアナキ 昭和のアナキズム運動(一九三五年までの運動) 全国的な連絡機関の必要が痛感 はこの ズム そして

経済的社会的情勢の変化はアナキズム運動に対して極めて不利な状況を生みだした。 とはアナキズム運動にとっては計り知れない打撃であった。 一九二三年九月の関東大震災に際して、大杉栄、 伊藤野枝らが国家権力によって虐殺されたこ しかしそれ以上に、 震災後の政治的

開かれ、 とめた。 を労働者に浴びせてこの反乱を鎮圧したが、 を骨抜きにしようとしたことに反対して自由ソヴェトを要求して立ち上ると、共産党政府は砲火 一九二一年、 アナ・ そしてスターリン主義への道を開いた。この年日本では日本社会主義同盟第二回大会が クロンシュタットの労働者と水兵とが、 ボル論争がはじまった。 ロシアに於けるボ この砲火は同時にロシア革命の真の生命の息の根を 共産党独裁権力の強化によってソ ルシェヴィキの政権の確立が、 強権的 ヴ

る労働運動社の活発な言論活動もこれを阻止することはできなかった。このような状勢のな 挙の幻想に大衆の心が次第に傾いて行くのを停めることができなかった。アナ・ボル論争に於け 社会主義の潮流を力づけたので、 労働組合総連合へ は当然であった。 の運動がはじまった。 労働運動の主流の位置を占めていたサンジカリズムは、 大会が凡ゆる傾向の社会主義者の注視の中で開かれたの 普通選 力 で

立によって決裂したのであったが、その思想的基底となっていたのは、アナキズムとボルシェヴ 時の政治的経済的社会的情勢の変化の焦点が普通選挙制の実施にあったために、大衆の目を革命 議会の活動が注目の的となった。 ズムの後退となったからである。 いかという基本的な問題から派生したものであった。そしてアナキズムに不利だったことは、当 一九二二年の労働組合総連合結成大会は、 ズムであって、その決定的な対立を浮き出させた。このアナ・ボル 政治闘争かという戦略上の対立でもあったが、国家権力が革命運動に利用できるか、できな あるいは改良主義的政治運動に向けさせたために、 黒連であった。 そしてこれに代って日本共産党とその指導下の日本労働組合評 このような情勢に対するアナキズムの反撃態勢を整えようとし 中央集権主義か自 労働運動におけるアナルコ・サンジカリ 由連合主義かとい 対立 は 経済的直接行動 う組織論

黒連が結成されてから約半年おくれて、一九二六年五月二十四日、 総連合運動におい て自由連

働組合の全国組織が、ここにはじめて結成されたのである。 集し得なかったことは、(注8) 会が結成された。しかし総連合結成大会で反総同盟、反中央集権として結合了の場合のなかで主動的に活動した印刷工組合連合会を中心として、 ものと言わなくてはならない。しかしとにかく、アナルコ・ 明らかにアナルコ・サンジカリズムの後退、 反中央集権として結集した組合の総てを結 サンジカリズムを明確に主張する労 政治運動への動向を示した 全国労働組合自由連合

主義の組合支配によって労働運動が改良主義に堕した時、これに反撥して はじめられ た 当初 明らかであろう。 対立する思想傾向が明らかとなるのは、思想の発展と深化のためには避けることができない 進める場合、運動の方法、 が、ゆるやかな結合ではあろうとも一つの黒色青年連盟、一つの全国自連として結合して運動を 力の否定、 を進めていた震災前のアナキズム運動においては、 えるであろう。 ばに言うと「純正」アナキズムとアナル さきに述べたように黒連はアナキズムの凡ゆる傾向を包含していた。 既にアナキストの間では論争の種になって 個人の自由等という共通の信念によっては結ばれていた。しかしこれらの グ これらの主張はアナキズムのなかに混在していた。各自グループをつくっ 労働組合運動に対する評価の相違は、革命的サンジカリズム運動が、 手段等について合意を形成しようとする時、 コ・サンジカリズム、そして個人主義的アナキズムと言 いたのであるから、 各自は自己の思想を主張しながらも、 全国自連がその綱領におい 各自の思想の根底にある 凡ゆる傾向とは、 て運動 大ざっ 1プ 0

合会議への代表参加の問題を契機としたのであった。 た。これが論争の域を脱して、対立抗争の激化へと進んだのは、その年の八月、汎太平洋労働組 し、機関紙にも発表され、 明らかにアナルコ・サンジカリズムを主張した時、 論争が行なわれたのは、 これまた避けることのできないこと これに批判的な見解が全国自連のなかに存在

34

暴力行使を合理化してしまったのである。 裏付けるかのように、労働組合の活動家のなかから共産党への転向者が現われたために、 ており、 と考えた。それはサンジカリズムが思想的根拠としてアナキズムと共にマルクス主義を受け容れ るのに、この会議参加を決定して代表を送ったのは共産党に通謀した一部の活動家の策動である(註) その影響があるとしてサンジカリズムの排撃を強調するに至った。しかも黒連の主張を かの「純正」アナキストはこの会議がプロフィ そして黒連の主張に理論的な基礎を与えたのは ンテル ンの策動であることが明瞭 黒連の 八太舟 C

主的な運動であるとしても、 アナキズムとが混合されているとして、サンジカリズムが独自の思想体系ではなく、労働者の自 と認めていた。一九〇六年のフランスCGTのアミアン綱領の思想的基礎には、マルクス主義と れた。八太はこの時には、全国自連を「資本主義と真向らから戦らサンジカリズムの労働組 八太舟三の「サンジカリズムの検討」は、 サンジカリズムとアナキズムとを同一視することは誤りであること 全国自連第二回大会前に、 「労働運動」 誌に 合

包していると警告し、少数者の創造的暴力説をとるアナキズムによって革命的精神を注入しない ン 調整の中央機関を構成せざるを得ないので、そこに権力発生の危険性を認めた。そしてそれはソ 労働組合による生産管理は、 限り、革命とは無縁な集団と化すると主張した。また彼はサンジカリズムが将来社会に予想する を強調した。そして、彼はサンジカリズムは ったのである。 ンジカリズム批判であるという、 ヴェト主義であり、 いると批判し、労働組合の発生や役割が資本主義の枠内に停まる改良主義に堕落する危険性 ジカリズムに対するマ 如何なるソヴェトも権力の発生源であると断ずるのである。こうして彼はサ ルクス主義の影響を過大に評価し、マルクス主義を批判することが、 労働価値説に何の疑問を抱かないばかりか、必然的に全国的な生産 のちに「純正」アナキズムと呼ばれた八太イズムを形成して行 マル クスの階級闘争説と労働価値説とを受け容れ

れて、「純正」アナキズムを主張する活動家によって組合運営がなされるようになって行った。 合活動は組合員個人の思想的政治的立場から見ると勢い共同戦線運動にならざるを得ないの することを拒否し、他方で組合外では組合員の政治的思想的自由を認容するものであるから、 て社会の根底をゆるがすことを主張すると共に政党政派、 それは次の実践的要求を現わしていた。サンジカリズムによる組合運営は、経済的直接行動によっ 全国自連においては、サンジカリズムの理論家延島英一が組合の実際の活動から後退する 哲学的 思想的流派の総てを組合へ注入

経験が、「純正」アナキズムの明確な態度を全国自連に要求することとなったのである。 を決定したことについては、八太の影響がなかったとは言えないだろう。 して、「我等は自由連合主義を以て労働者農民解放運動の基調とする」という綱領を掲げること ん八太の論文が、 会の蚕食するところとなり、 共産党支配の明確な赤色労働組合主義の思想的政治的活動の滲透に抗し得なかった。そして評 全国自連第二回続行大会を分裂させたのではなかったが、 その上、一部のサンジカリストが共産党へ転向するという事 全国自連が分裂を賭 実等の もちろ

36

る経済的直接行動が、 て行ったが、 して、日本自協は幾多の争議を積極的に戦い、 して消極的な態度を強めて、次第に大衆から遊離して行き、運動の衰退へと陥って行ったのに反 成し、アナルコ・サンジカリズムの族幟を明らかにした。これを母体として日本労働組合自由連 したのである。 合協議会(日本自協)が結成されたのである。日本自協の結成は、アナキズム戦線の分裂を固定化 が、脱退した組合は一九二九年七月に至って、関東地方労働組合自由連合協議会(地方自協)を結 た改正綱領を決定し、 一九二七年三月、 次第に組合主義の限界を自覚せざるを得なかった。それはサンジカリズムの主張す 全国自連が日常闘争と革命とを断絶させる主張をとったがために、 全国自連第二回続行大会は綱領改正問題で遂に分裂した。そしてさきに述 全国自連をアナキス 常に政治闘争に発展する因子を含んでいることの認識の自覚であった。 ト団体に変化させて行く道を開いてしまったのである 合法左翼と呼ばれた組合との共同闘争にも 労働運動に対

主張したが、この闘争を展開する組織とは何であるか、が明確に答えられてい の関連の確立によって戦線を確立すべきではないのか。という問題の提起であった。 アナキズムの革命的戦闘的闘争組織によって戦われる政治闘争へと発展させなければならないと の政治闘争は政治権力奪取のための政党的、議会主義的闘争ではなく、如何なる経済闘争も明確 らと、アナルコ・サンジカリズムはアナキズム運動の一分野であるのか。それならばアナキズ の思想団体とアナルコ・サンジカリズムを主張する労働組合との関連は如何にあるべきか。こ 一九三二年九月、雑誌「黒旗の下に」が創刊された。この雑誌が力を注いでい ないことに悩んだ。 た主題は何かと

残存する社会から、 を対立させたのは八太イズムの特質ではなくクロポトキンであるが、これをサンジカリ の基礎にすえたのが八太イズムの特質であった。ここで問題になるのは、 「階級闘争説の誤謬」と題するパンフレットを全国自連から発行した。 これより先、一九二九年八月、八太舟三はさきの「サンジカリズムの検討」を増補訂正 7 実現する社会が理想的な無政府共産社会であるのか、 将来の無政府共産社会の経済学として示唆を与えているクロポトキンの社会生理学の立場か ルクスが資本主義の分析によって構成した労働価値説を批判していた。この二つの経済学 いくつかの段階的過程が存在するのか、 理想的な無政府共産社会へ発展して行くのか、 という問題の検討なし それともある期間は資本主義 あるいは無政府社会と呼び得 この八太のパン 資本主義が廃止 に、 少数者の創造的暴 の影 ズ フレット ム批 響の て、

ちに民衆の創造的な無政府共産社会への建設力が発揮されるという楽観的と思える結論を導き出 いることであっ (これを八太はアナキズムの戦術と考えてい た。それをめぐって「観念論だ」「ボルへの追随だ」という悪罵の応酬とな た)によって、資本主義と国家を破壊すれ ば直

をその手に占め得るとの展望に立っていたので、芝浦に呼応して立ち上がろうとしなかった。 労働者全体の問題にまで発展させるか、工場占拠、 義的合理化政策によって引き起こされたものであったから、これを芝浦のみにとどめないで金属 は、芝浦工場の労働者が敗北しても芝浦工場の鶴見工場への移転はいずれ実現し、全東芝労働者 と抗争によって労働者の団結が著しく弱められた。鶴見工場に力を 持って い た 社会民主主義者 か、いずれかが必要であったのに、ヘゲモニー獲得にばかり目を注いだ政治主義者による分裂策 のようにして芝浦の労働者は惨敗し、組合活動家はほとんど全員解雇され、芝浦労働組合は解散 ち切られた。その後は印刷工、 一九三一年、 芝浦製作所の労働者の大半は芝浦労働組合に組織されていたが、 いたし、未組織の労働者もいた。この争議は芝浦工場の鶴見工場への移転合併という資本主 かった。それと同時に、 日本の 7 ナキズム 小企業で働く機械工、 運動にとって重大な事件が起こった。 全国自連が持っていた唯一の大企業の組織労働者との提携が 労働者管理の強行によって勝利を ガス社外工、 総同盟、 自由労働者等の組織労働者 芝浦製作所の大争議 全協等の組合員も であ ح

ている人達が自主的に地方の農村へ分散して活動することの必要を痛感した農村青年社グル の他は失業者であるとい の革命運動がはじまった。一九三一年であった。宮崎晃、星野準二、 て批判された人達の少数者になって行った。この状況を見て、都会にいてリャク等をして生活し いう意見にな たり、 小野長五郎等は農村音 解雇手当獲得の交渉をしたりするばかりで、 地方農村へ積極的に出掛けて同志を獲得した。 っていった。そして多くのアナキストは農村青年社から存在的アナキストと呼ばれ 行なわれないのでますます日常闘争を革命運動に結合させることなどできないと う惨めな状況に陥った。その後は、 パンと自由社の他に 日常闘争とも階級闘争とも言 「黒旗」の誌面を利用して宣伝に努め 一人、二人の労働者の首切りに反対 八木あき子、 田代儀三郎、鈴

れないとして財閥、 に対する帝国主義的侵略の尖兵となった青年将校は、兵士の故郷農村の救済なしには強兵は得ら 小作料と税金との重圧に苦 デタ 一九二九年の経済恐慌は農村をも恐慌に巻き込んだので、 独占資本は中国侵略によって恐慌を切り抜けようとし、 を行なおうとして失敗したが、これによってかえって、 内革新の断行を企図し、 独占資本の搾取に反対して、その手先、 しんだ農民は、 五・一五事件、二・二六事件といわれる二回に亘るク 飯米さえ不足し、娘の身売が続出した。 官僚、 農村の疲弊は甚だしく、米価の暴落 中国人民の搾取を強行した。中国 財閥、 議会政 独占資本は軍上層部と結 治家を一掃し、 これ

れどもここには組織は権力の萠芽であるという主張は残存していたと言える。 自連等を解散して分散し、総ての結社を否定した無組織の組織、網の目状の組織を主張した。 村が革命の基盤であるとの認識に立って、自由コンミュン建設を目標に全村運動の主張を明らか びつき帝国主義的侵略を強行し、やがて太平洋戦争へと進むのである。農村青年社は疲弊した農 にして、岩佐作太郎や八太らの日常闘争と革命との断絶思想に反対を表明した。民衆の中へ、民 自主分散したアナキストを主動者とした全村運動の展開を期待した。 そして黒連、

この時に自協との共同闘争が芽生えた。新しい動きがはじまったのである。 働組合員を総動員して戦った一九三二年のメーデーは自連再建の第一歩であった。それと共に、 意義があったと言えるだろう。従来、葬式行列として否定していたメーデーを、アナキスト、労 混合体となったことを自己批判し、その再組織へと動き出す契機を与えたことは、 現状への反省がはじまった。農村青年社は資金獲得活動の失敗によって、一九三二年一月東京に いた運動の中核となっていた人達が捕えられて潰滅させられたが、自連が大衆団体と革命団体の 黒連、自連を解散せよとの主張に、黒連、自連の積極分子は強い衝撃をうけた。そして自連 極めて重要な

## 四 革命団体組織のためのいろいろな試み

運動の話は出来なかった。 強い影響を持つと考えたからであった。その頃小川は千葉県の成田に近い染井に住んでいたし、 岩佐老人は太平洋岸に近い茂原に引っ込んでいた。 た。この訪問は連盟中央委員会の決定によるものであった。この二人の意見はアナキスト運動に 日本無政府共産主義者連盟を結成した後のことである。私は小川光生と岩佐作太郎 と を 訪 れ 私が訪ねた時、小川は肺炎でねていたので、

ば連絡をとればいい。必要もないのに、連絡をとったり、 数の精鋭で充分だ。大勢集まれば、どんな者が加わるかわからない。各地の同志は、必要があれ る。そしてアナキストの総てを結集したら、敵の思う壺に陥るだけだ。何か事を行なうには、 にも立たないから、 った、と語ってから、革命団体結集などということを軽々しく口にしてはならぬと戒めたのであ な、彼は天皇暗殺の計画などしなかったのに、 言壮語癖を知っていたが、そんなことを軽々しく口にしては、危険だと思っていた。はたせるか 命団体をつくる必要があると思うが如何だろうかと問いかけると、老人は急に慎重な態度になっ くては不可能だと思う。ところがアナキストはバラバラな状態である。これを一つに結集して革 私は老人にむかって、現在のような反動的な状況を打破するためには、 彼は幸徳の話をはじめたのである。幸徳は在米中、 やめた方がよかろう、と私が革命団体結成を計画していると察してか、 そんな風なデッチ上げに会って死刑にされてしま 天皇暗殺を揚言していた。自分は彼の大 一つの団体に結集したりしても何の役 革命的勢力を結集しな

計画を思いとどまらせようと、説得しはじめたのである。

ズム キズム運動を老人と同じ方法論として理解していたのである。 見が衰退に直面 私は老人の意見は、こうであろうかと推察してはいたものの、失望を禁じ得なか 運動の衰退の原因の一つは、アナキズムの組織論の欠落にあると考えていたので、老人の意 しながら、 旧来の方法論から出ていない のに失望したのである。 私も以前はアナ 2 た。ア ナ

はア そして、アナキストは革命の破壊的局面においては、常に大衆の先頭に立って戦って 大衆自身の創造的活動にゆだねるべきだと主張して、一定の政治的綱領によって、 こ れ も革命が旧国家権力を打倒して、 者となるのである。それ故、アナキストは自らを一定の政治的、経済的、社会的綱領を持っ 激しく戦うことを宣言してきた。アナキストとマルクス主義者とは、 自らが自らに課した任務として自覚した個人の自由な意志に委ねたのである。 つの党派として組織することは殆んどなかった。 社会革命は大衆自身の仕事である。 ナキストが常に強調してきたものであると共に、マルクスもこれに反対しては あるいは行動による宣伝によって、 権力を以ってこれを統制し、上からの計画を強制しようとする一切の企てに対して 建設的局面を迎えると、アナキストは社会の再組織の仕事 ▲労働者の解放は労働者自身の力で! 大衆の革命的意欲を目ざめさせ、 組織したとしても、その活動するとしないとは この時に両立し得ない . V これを行動にまで 口頭による、 い いた。 いなか うス 2 1 れど た は た。

態をとらざるを得な とはアナキスト 奮起させること、 上がるため その行動は、 集体、それは誰からも命ぜられもせず、自発的 常に準備を整えることが、 が常に強調してきた いきおい単独 一度機会が来た時は、 で、 あるいはこのような同志と共に計画 ことであっ 政府の倒壊、 その任務なのである。 た。 かくてアナキストは少数のか 生産点の占拠又は破壊等の直接行動に立ち ts そし て自由な ≪何日にても立つ準備あり して行なわれるという形 合意に基づ たく結ばれた同

彼らは し、大衆の支持を獲得し、 凡ゆる大衆の集会、コンミュンであろうと、ソヴェトであろうと、 することが かろうか、そしてそれが敗北につながったのでは タリアの前衛として共産党の独裁権力の樹立のために、 な党組織を動員し、 は 革命の成功と失敗は、 党の決定した方針、 烈な活動があっ シア革命に 可能な組織を持っていたのではなかろうか。武装した人民を赤軍に再編する 際してアナ たのではないか。ロシアでの経験は、将来も予想しておか 中央委員会の決定に基づいて、 党綱領の実現のために、 政策を大衆自身によって作りあげたかのように指導し、 大衆が誰を支持するかにか + ス h から とっ た組 なかろうか、 織と行動 いい かっつ 決定的瞬間に持っている総ての力を集中 かえればプロレ は 執拗に戦うことは明らかでは ているし、 と考えるに至った。共産党は常 このような形態をとっ 労働組合の集会であろうと、 大衆の支持は、 タリア独裁 ねばなら の名によるプ たので K ため コ は なかろ ない。 ン は ts

は大衆と日常的に結びつき、日常的闘争の先頭に立って戦っていなくてはならない筈である。 得る革命団体に自らを組織する必要があるのではなかろうか。そのためには、 出来る限りの縮小、大衆自身の権力の把握等々が実現し得るために、 た革命団体を組織する必要があると信ずるに至った。 はや少数者の孤高の誇りに自己満足を味わっていてはならない。そのためには明確な綱領を持 よって示されるのである。とすれば、アナキストが大衆の支持を受けずして、 能ということは当然であろう。 あるいは ソヴェト、 あるいはその他の大衆集会に於いて、どの綱領、どの政策が決定される 赤軍を組織しないような徹底的な人民の武装、 決定的瞬間に総力を結集し 今からアナキ 代表者の権限 革命の勝利は ス 不

軽蔑するある種のアナキストの集団と化していたからである。私は労働組合の《 めの理論であって、 が大衆から遊離するだけであると考えた。 含まれた真理を認めていたけれども、 ような見解をとりはじめたのは、当時のアナキストが大衆か らであった。 労働組合を解消してアナキスト 労働組合である筈の全国自連が、 これは労働組合のなかで、改良主義的偏向と戦うた のグループにしてしまっては、 い つか労働者 の日常闘争を改良主義として ら遊離してい 山賊の親分子分 た現実の ただアナキス

この ない論争を引き起こすことになったのであるが、日本でも例外ではなかった。 山賊論という見解はアナルコ・サンジカリストに対する批判として生れ、 それ以来はてし

の再検討をは 一九三二年末から翌年のはじめに たのである。 じめた。そし てアナルコ・ かけて、 サンジカリズムに反対する理由が極めて薄弱であると反 私は少数の同志と共に、 アナルコ・サンジ カ IJ ズム

は教えられない」と不満をもらしたことがあった。 リズム研究の会合で機械技工組合員金沢末松は私に対して 対する再検討の結果であった。 ているうちに、現実の闘争についての戦略戦術論の欠如に不満を感じたのであった。サ わゆる「純正」アナキ スト 全国自連の一部の人達は、 の間 でのアナ N = ・サンジカ クロポトキンの『パンの略取』を研究 「何度読んでも、 リズムの再検討は、 どうしたらい クロポト ンジカ 丰 0 1

はどんな風にしてはいけないかを教えたと嘆息させる結果となったことは、 に支持された権力主義者への屈服が現われて社会革命は終りをつげて、クロポトキンをして革命 的活動が行なわれていたのであるが、ロシアでは数百年に及ぶ国家権力の下に生活して来た慣 会革命であった時代には、著しくアナキズム的色彩を帯びていて、 幸徳秋水の訳書以来の発禁本であったことも手伝って、アナキストにとっては革命はどんな風に 共産主義の予想し得るかぎりの建設的部分を書いた『パンの略取』(『革命家の思い出』参照)は たらいいか、を教えてくれた貴重な書物だったのである。 従来の日本のアナキズム運動は、著しくクロポトキンの影響を受けていた。 ロシア革命が人民大衆自身の真の社 クロポトキンが予想した建設 われわれの学んだこ 彼がアナ ズ TH

とであった。

いた」という過渡期の問題に対する検討の欠落について考えてみることが必要なのではなかろう この事実は、 という見解を生んだのである。 アナキズムに対するレ ーニンらの非難、 「目がさめたらアナーキ ー社会が生れて

にまかしておいて、はたして勝利し得るか、この闘争こそ過渡期の問題なのだと考えるに至った。 対して、大衆の自治的創造的な経済建設を防衛し、促進するアナキストが雑多な小グループの活動 っていた。 結合というレーニンの命題を、いろいろな色彩に塗りかえはしたが、それがほとんど常識とさえな しようが、国家権力が社会主義建設のためには不可欠な存在だと主張しているのである。 ロシア革命以来、アナキズム以外の社会主義の総ての流派は、 全国自連のなかで、全国自連を再び大衆団体として自覚し、再組織しようという意図が次第に いいかえれば、国家機構の破壊を主張しようが、あるいは現体制の漸進的変化を主張 下からの革命と上から

強くなったのは、一九三二年のメーデーそれに続いて十月、第三回大会召集を決定した時からで た労働組合が持つ他の面、革命的伝統を生かすために、アナキストの強固な革命組織が作られな が大衆団体としての本来の姿に返る時、 あった。それは運動の衰退を盛り返そうとする努力の現われであった。これと同時に、全国自連 改良主義的偏向に押し流されるであろうから、この組織をつくることは緊急な課題で 労働組合が持っている改良主義的偏向と戦うために、ま

めの中核となるのは「自由連合新聞」であると、新聞編集部は考えたのであった。 あるという主張が、 「自由連合新聞」に現われはじめたのであった。そしてこの組織をつくる(注は)

機関紙は別に発行することにきめた。 して反対者を説得する意気込みだった。私がこの案の説明をした。二、三の質問があったが、反 も自由に会合に出席して、 く提案してみよう、ということになった。全国自連には役員もないし、 の新聞にするために、発行の主体を全国自連から切り離して、 は何回かの会合を開いて、 L いなかった。こうして一九三三年一月に自由連合新聞社が創立された。そして全国自連の かしこの提案が全国自連の賛成を得られるかどうかには、自信はなかった。 「自由連合新聞」 意見を発表することができた。会合が開かれた。われわれは全力を尽 「自由連合新聞」を全国自連の機関紙ではなく、アナキズム運動全般 の編集部は、山口安二、 梅本英三、 自由連合新聞社をつくろうときめ 伊藤悦太郎と私だっ 委員もいないので、誰で しかしとにか た。 n

放は社会革命を遂行する以外に不可能であることを経済的政治的な日常闘争を活発に行うことに 動方針のなかで、全国自連は労働者の経済的利益を擁護する大衆団体と規定し、 よって啓蒙教育する機関であると、主張することにした。 と妥協を伴うからといって軽視することなく、 東京地方使用人組合員として全国自連に加わっていた私は、第三回大会の準備をはじめた。運 労働者の利益のために戦いつつ、 これと同時に、 日本自協とは共同闘争 日常闘争は改良

を通じて、合同 しようと呼び掛けることにした。

従来の綱領もこれを改正することとして次の二項目の綱領を作成した。

我等は自主的団結による日常一切の闘争を通じて労働者農民の解放に邁進す。

義一を選出して議事にはいった。大会準備委員会の報告に続いて友誼団体の祝辞に移ったが岩佐 ちまち中止を命ぜられたので議場が騒然となると、臨監は直ちに「解散」と叫んだのであった。 大会への自連の祝辞を謝したのち、自連、自協の合同を強調する演説をはじめたが、これまたた 作太郎、中尾正義の挨拶は途中で中止を命ぜられ、次いで自協代表高橋光吉が、さきの関東自協 とたちまち中止を命ぜられるという有様であったが、とにかく議長に大塚貞三郎、副議 家権力のこのような無茶な弾圧は、当時は日常茶飯事に等しいできごとであったから、 議を行なったのである。 もこれを予想していた。 たして強い反対に遭遇した。しかし激論の末、多数の賛成を得たのである。 全国自連の第三回大会は予定通り、一九三三年の四月二日、 かくて大会は開会数分で、 会場はアナキストと労働者と私服の特高とで埋めつくされた。秋本義一が開会の辞を述べる 我等は自由連合社会の建設なくして労働者農民の全き解放を期し得ざる事を確信す。 大会の前日、大会準備委員会を梅本の家で開いて、ここで運動方針の討 「純正」アナキストにとっては到底承認できない運動方針の転換は、 解散を命ぜられたので、何一つ実りのある決定はできなかった。国 東京牛込の城西仏教会館で開 長に秋本 われわれ

ストの運動方針とは これまでのアナキ てそれぞれの運動を進めるより仕方がないのである。 ならないのである。 ストの通念としては、 少数意見は尊重され、誰もこれを抑制する権利は 多数の賛成を得たとしても、 その方針が総てのアナキ 15

は来ないことは明らかであった。 を進めることになった。しかし、 この運動方針はとにかく多数の賛成を得たので、全国自連はこの新しい方針 アナキストの革命団体がつくられなければ、 この方針は生きて で運動

た。 かく一笑に付した。 いたためか、あるいは門外漢の私が自分の領域に口を入れるのが気に入らなかったためか、とに しなかった。 最初の試みは、黒色青年連盟の再建の検討であった。 「あれは潰した方がいい。いや、そのうち潰れるだろう」 黒連の中心人物として自他共に許していた前田淳一は既に運動する意志を喪失して 梅本は「腐敗、堕落してしまった黒連は再建しても無駄だ」と言って反対し L かしこの連盟の再建に は M

浜松楽器の歴史的な大争議には黒連は大いに応援していたー 絡事務を処理していた。 前に述べた通り黒色青年連盟は、一九二五年末に当時存在したアナキストの小グル 全国自連内のアナキストの連絡協議機関として発足し、事務所には数名の同志が居住して連 財政的な理由もあって主体である全国に散在した小グル 当初は活発に演説会を開いたり、労働争議を応援したり一 -機関紙を発行したりしていた。し プ、 小結社が時代の流れに押し流 共同印刷や

組織化はできないからである。 てはならない。 活発に活動し得るためには、主体である小グループ、小結社が明確なプログラムを持っていなく れは組織上の欠陥から派生したとも考えられる。 たかのように消滅していったので、黒色青年連盟がいつか いきおい、場当り的、 から見離され孤立した。黒連衰退の原因は、現実的には内部暴力の問題であったが、 観念的にアナキズム革命を主張しているだけでは、何一つ具体的な行動は生れて 内部に対してだけ暴力をふるうのではなかろうかと思えるほどに弱体化して、 ジカリズムとの論争はこの傾向に拍車をかけた。さきに述べたように黒連は 思い付き的行動に終るか、新聞雑誌の発行にとどまって、読者の 自由連合主義にのっとった連絡協議機関として 『黒連』という小グル 1 プに 銀座

50

った。 小グル グル 体の組織を作って、各地に有機的に結びついた部分をつくる方法をとるべきだ。い われわれがこのような研究、検討をしていた時、 これが梅本と崔学忠と私との革命団体結成のための会合で話し合っ ープ、小結社が殆んど消滅したか、 ープの自由連合ではなく、 全体の組織の拡大という方法をとろうと考えたのである。 無活動の状態に陥ってしまった今日では、 日本自協に戦線確立研究会ができたことを知 た問題であ 5 むしろ逆に全 わば独立した た。 T

日本自協は全国自連を脱退した人達によって結成されて以来、 労働争議の応援、 激発等の日常

なのではないかという反省が生れて来た。そして田所茂雄、山田健介等の主唱で戦線確立研究会 縮小する傾向が生れていた。 闘争を活発に行なってきていたが、それにもかかわらず組織は拡大せずに、 の敗北ののちには組合を去っていった。このような状況を打開するためには同志的結合体が必要 られる労働者が多かった。 おけるストライキ闘争は、攻撃的というよりもむしろ防衛的であったから、闘争のあげく首を切 にアッピールを発行したのである。 が生れた。 彼らはアナキストの革命団体結成のため検討が必要であることに注意を喚起するため 彼らとの間に同志的結合が確立していなかった場合には、彼らはスト ファシズムへ傾斜していた社会状勢に加えて、経済恐慌のただ中に 停滞し、むしろ漸次

題を討議することが適当と考えると勧告することにした。こうして梅本は田所に連絡し、 体結成を求める声があることを知って意を強くしたが、このようにこの問題を公然と論議すると われわれの提案を快諾した。 とに危険性を感じたのである。梅本と私とは彼らに共同研究を提議し、あわせて非公然にこの間 リ版刷のこのアッピールはわれわれの手にもはいった。 梅本と私とは自協のな かにも革命団

体の結成が必要であるとの見解が生れていたのであった。 自連自協を問わず、アナキストの積極分子の多数の間には期せずして革命団

これとは無関係に二見が同志の間を説得して歩いていた。

51